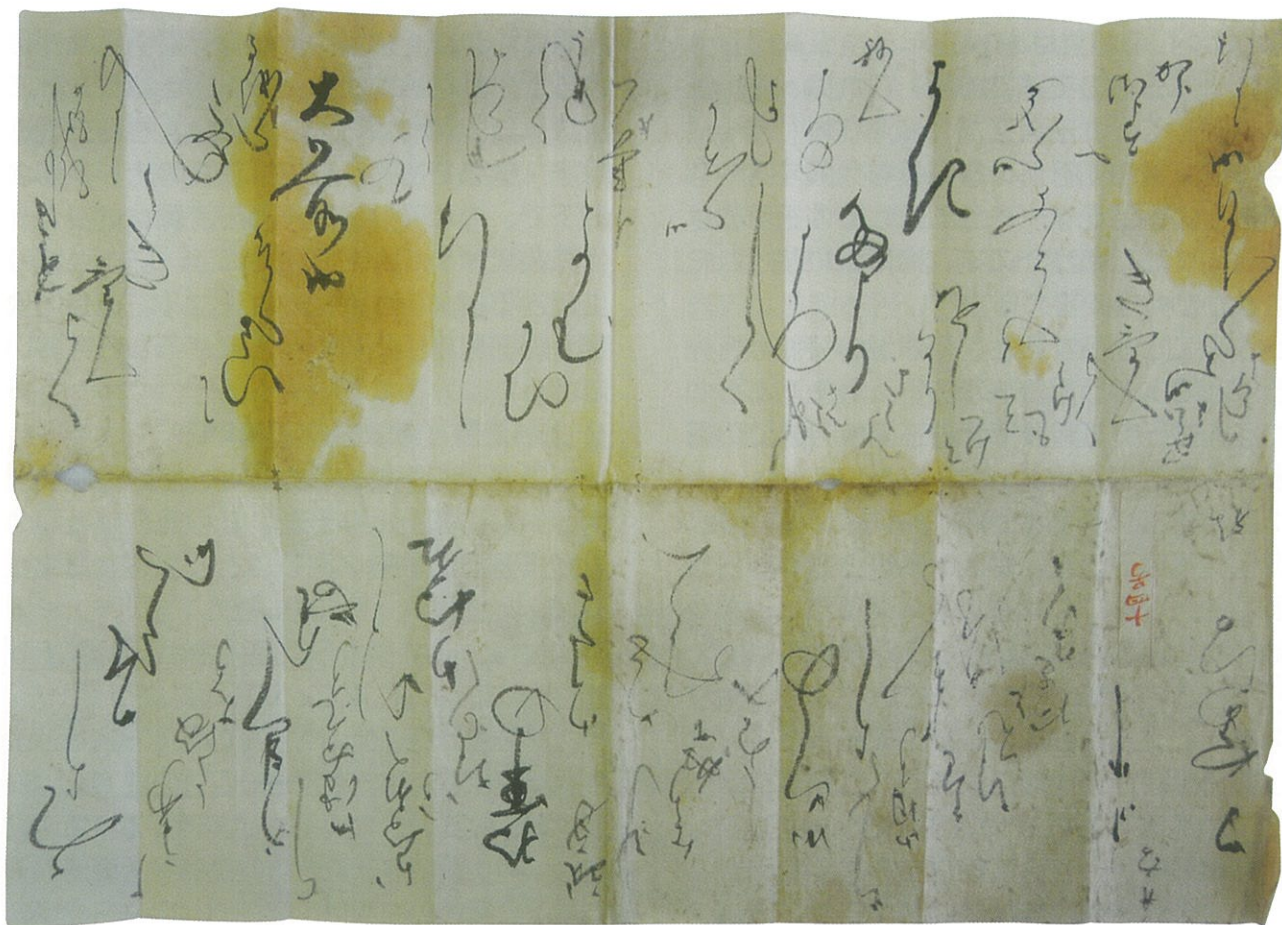


2016年春季企画展示関連

海津城の主たち

武田信玄から松平忠輝まで



おね書状(花井家寄託・当館蔵)

第1章 海津城の築城以前の様子

長野市松代町は、海津城（松代城）の城下町として栄えた。この海津という地名は、その成り立ちについて、蓮乗寺（長野市松代町）が海津山と称していたのでこれを始原とする説、また、西念寺の創建が海津であったとする説がある。

武田信玄が城を造ると、海津城と名付ける。その後、慶長の初めには城の名前を「待城」もしくは「松城」としたという。そして正徳年間には、「松代」と地名が変わり、城の名は「松代城」となったというのである。城の名である「待城」「松城」がどこに由来するのかは諸説ある。

第2章 海津城の築城と寺院

海津城は、武田信玄が北信濃支配の拠点として築いた城である。

「海津」の初見は永禄三年（一五六〇）九月二十三日付の史料である。これは、内田監物に対して、武田信玄が「海津在城」するによって、監物知行所の普請役を免除する内容である。弘治元年（一五五五）に内田監物は佐野山在城であったので、海津城に移されたことがわかる。

このことからすると、海津城の築城は、先行するであろう尼飾城が史料上最後にあらわれる永禄元年五月から永禄三年九月までの間と考えられている。

武田信玄は春日虎綱を海津城に配置した。春日虎綱はその後、香坂（高坂とも）を名乗ることとなる。なぜ香坂を名乗ることになったのかは明らかでないが、北信濃の名族としての香坂の名跡を継がせることで、この地域の支配の正統性を補完したのであろう。

春日虎綱が海津城に入ると、武田信玄から三つの権限の委任を受けている。一つ目は、緊急事態に際しては武田信玄の指示を待つことなく、兵を動かす権限。二つ目は、北信の武士たちに信玄が所領を宛行うときの朱印状の奉者となること。そして三つ目は、竹木伐採の権限である。すなわち、海津城や管理下の城の普請・作事、出陣に際しての陣屋の築造にかかわる権限である。

天正六年に春日虎綱が亡くなると、その子・信達（信達）が跡を継ぐものの、翌年には駿河に移ることとなり、海津城には武田勝頼の側近・安部勝宝が入ることとなった。

第3章 武田家滅亡と海津城

1 森長可の城

織田信長が甲斐国を攻めると、武田勝頼は敗走した。海津城にいた安部勝宝も勝頼に従い甲斐国で亡くなった。

天正十年（一五八二）、武田家が滅亡すると、かわって織田信長が信濃に入部する。海津城には信長の臣・森長可が入り、更級、埴科、水内、高井の北信濃四郡を与えられた。長可の入部後まもなく、北信濃では一揆が起こった。一揆軍は大蔵城（長野市豊野）に籠もり森の軍と応戦したが、一揆軍は敗戦し、子供・女性あわせて三〇〇〇人近くが犠牲になったという。

程なくして、京都・本能寺で織田信長が倒れると、長可は直ちに信州を引き払った。これに乗じて海津城に入ったのは、春日虎綱の息子・信達である。信達は越後の上杉景勝の配下で、海津城は上杉景勝の支配となった。

森長可はその後、天正十二年（一五八四）に起きる長久手の戦いで戦死する。信長の次男・織田信雄に組していたところからの戦いであった。

2 上杉景勝と海津城の須田満親

森長可が海津城から去ると、北信濃は支配者のいない場所となった。この時、越後国の上杉景勝が北信濃に入ることとなる。海津城には、小幡昌虎と春日信達がいたが、上杉景勝に従った。なお春日信達であるが、武田家滅亡後に海津城に戻り、森長可に従っていた。

上杉景勝は春日信達を謀反の罪で殺害し、上杉景勝による海津城を含めた四つの城（飯山城、長沼城、牧島城）の再編成が実現する。海津城には、村上景国を入れた。景国は村上義清の子である。景国の権限は、武田時代の春日虎綱の権限を引き継いでいた。なお、小幡昌虎については、越後への移住を命じている。

村上景国のあと、海津城には景勝の妹婿である上条宜順が入る。そして、天正十三年に須田満親が入ることとなった。須田満親は

現・須坂市出身の武将である。須田の任命は、越中における戦功により、その手腕を買われたと理解されている。また、豊臣秀吉との交渉やその人脈からの登用であったともされる。このため、須田満親には警察権・裁判権、軍事行動権、軍役の徴発権などそれまで以上の権限が与えられた。

須田満親が海津城にいた文禄三年（一五九四）、太閤検地が行なわれた。なお、豊臣氏五奉行の一人増田長盛の指導で作られた検地帳が残っている。

慶長三年（一五九八）、豊臣秀吉の命により上杉景勝は会津に移ることとなり、海津城も須田満親が城の引渡しを行なった。この頃をもって、北信濃の戦国時代が終焉する。

第4章 家康への忠義と真田との戦い ー 森忠政と関ヶ原の戦い ー

1 太閤蔵入地

上杉景勝が会津に移ると、北信濃は太閤蔵入地、すなわち豊臣氏直轄領となった。この指揮を執ったのが石田三成である。これにあわせて、豊臣大名の田丸直昌を海津城に置いた。田丸には四万石を与えた。

このころ、海津城は近世城郭として整備されたと考えられている。石垣が築かれたのである。

慶長三年、豊臣秀吉が死ぬと、徳川家康が勢力をもつこととなる。慶長五年に、徳川家康は田丸直昌を美濃兼山（七万石）へ、そして美濃兼山の森忠政を海津城に移動させた。森忠政には川中島十三万七千五百石が与えられた。

2 森忠政の入部と関が原の戦い

忠政が海津城主であったときの最大の出来事は関が原の戦いである。関が原の戦いにおいて、信濃上田城での真田昌幸・幸村の軍と、徳川秀忠（家康の子）との戦いは有名である。上田城に隣接する小諸城には仙石秀久がおり、秀忠軍にかなりの軍功を残す。一方、徳川方の北のまもりである海津城には森忠政を配置した。

関が原の戦いにおいて海津城の役割は重要であった。真田昌幸が上田城に引き返すと、徳川家康は森忠政を海津城に戻し、川中島をまもらせている。森忠政は海津城にいたが、徳川家康、秀忠と頻繁に書状を取り交わして情報を集め、行動の指示を仰いでいた。

徳川秀忠軍三万八千人と真田昌幸・幸村軍二千五百人が上田城で激突したが、この時に忠政は葛尾城に陣をとり、真田勢と戦ったとされる。葛尾城は信濃の古来からの武将・村上氏の城である。川中島の戦いのころ武田信玄と戦った村上義清はここを居城としていた。

徳川秀忠が終わらない上田での戦いに見切りをつけ、関が原へと兵をすすめるが、この時、森忠政も同行することを望んだ。しかし、秀忠は忠政を残して信濃の警備を命じた。関が原への不参について忠政は不安が大きかったが、秀忠は何度もなだめている。関が原の戦いの後、徳川家康から信濃に残ったことはもっともなことであり、「境目の仕置」すなわち、海津城のまもりには油断のないようにとの書状を受け取った。

海津城の城主等の変遷

領主	郡司 城将 城代	城代・城将の場合その権限	参考事項
武田信玄 武田勝頼	春日虎綱（かすが とらつな）	①北信地域の軍事指揮権（時には真田の権限を侵さない程度に上野の権限も） ②北信の武士たちに所領をあてがう際の奉者 ③竹木伐採の権限、加えて裁判における意見の上申（権限は大名）	史料上、東条城（尼師城）は、永禄元年を最後に見えなくなる 海津城の初見は永禄3年9月23日の書状
	春日信達（かすが のぶたつ） 安部勝宝（あべ かつよし）	春日虎綱に与えられた権限と同じ 春日虎綱に与えられた権限と同じ	
織田信長	森 長可（もり ながよし）		本能寺の変で逃げ帰る
上杉景勝	村上景国（むらかみ かげくに） 上条宜順（じょうじょう ぎじゅん）	春日虎綱に与えられた権限と同じ	村上義清の子 景勝の妹婿
	須田満親（すだ みつちか）	①北信地域の軍事指揮権（景勝の判断を仰ぐ必要なし） ②警察権と裁判権（景勝に指示を仰ぐ必要ない） ③出陣の際には、軍役を2倍にして提供させることができる	越中での功労者 かなりの権限を与えられる
田丸 直昌（たまる なおまさ）			4万石 残りは太閤蔵入地
森 忠政（もり ただまさ）			
松平 忠輝（まつだいら ただてる）			
松平 忠輝	花井吉成（佐左衛門） 筆頭家老	松平忠輝が越後福島城に移り、高田領の一部となる 2人とも筆頭家老 権限は分からない	墓は長野市松代町 西念寺 このとき大坂の陣がおきる 義雄は切腹
	花井義雄 筆頭家老		
松平忠昌（まつだいら ただまさ）		12万石の松代藩領国成立	結城秀康次男 のち福井藩主へ
酒井忠勝（さかい ただかつ）			山形城主・最上改易で鶴岡へ
真田信之（さなだ のぶゆき）			上田城から

海津城・鎮守の寺 東光寺(練光寺)

松代町東条の、尼巖山を背負う斜面に東光寺がある。眼前にはあんず畑が広がり、眺望抜群。宗派は真言宗。初め練光寺と号し、武田信玄が海津城の祈願寺としたとされる。天正8年(1580)、武田勝頼が練光寺泉良に北条氏政攻めの戦勝祈願をさせた朱印状が伝わる。本尊は阿弥陀如来立像で平安時代後期の作と見られる。また須弥壇上、本尊の隣に安置される愛染明王坐像も、やはり平安時代後期の様式を持つ。練光寺の創建については明らかでないが、これら平安時代の仏像が、歴史を物語っているのかもしれない。



練光寺本尊 不動明王立像

練光寺の本尊と伝わる不動明王立像。両脇に矜羯羅(コンガラ)・制多迦(セイタカ)童子を伴う。右手に剣・左手に索(投げ縄)を持ち、火炎を背負う恐ろしい姿から、戦さの守護神として戦国時代の武将から信仰を集めた。武田信玄の祈願寺であった練光寺の本尊としてふさわしい。ただし本像は、素朴で力強い表現ながら、近世に下る作と思われる。



東光寺 愛染明王坐像

愛染明王は、和合や親睦などを祈る儀式の本尊。眼や口を大きく開け、額には第三眼、腕は六本持ち、頭上には獅子の顔を表す獅子冠を着けた特徴的な姿。本像の腕や持ち物は後補なので、本来の持ち物は分からないが、上に挙げた両手には弓矢を持つ例が多く、軍神(イクサガミ)としても信仰された。眼や口が後世塗りつぶされているため、本来の表情が分かりにくいのが惜しまれるが、浅く流れるような衣の表現や、低く広く張り出した膝の表現などに、平安時代後期の様式が見られる。



中条宮 弁財天坐像

蛇の体に老翁の頭を付けた、宇賀神という異形の神を頭上に載く、宇賀弁財天と呼ばれる姿。背面に残る取りつけ跡から、本来は左右4本ずつの手を持つ八臂像だったことが分かる。弁財天は古代より音楽や戦いの守護神として信仰されたが、中世に宇賀神と結びつくことでその福德性を増し、室町時代以降は七福神の一として広く信仰された。本像は、宇賀神の底に墨書銘があり、「上田別所」などの文字が読める。当寺への伝来は不明ながら、他所とのつながりを推測することのできる貴重な存在。やや堅く四角張った造形であるが、全身をバランスよく的確に彫り上げており、室町時代に遡る佳品である。

海津城・鬼門の寺 福德寺

福德寺は、松代町東寺尾にあり、永享2年（1430）僧祐俊の開創と伝わる真言宗豊山派の寺。武田信玄の海津城造営に際して地固めの修法を行うなど、城の艮の方角で鬼門の祈願所として位置付けられた。弘法大師ゆかりの霊場信州四ヶ寺の一として知られる。本堂須弥壇上の本尊は地蔵菩薩立像で、左右に金剛界・胎藏界の大日如来坐像を安置する。護摩堂の本尊は薬師如来坐像で、平安時代に遡る作例と見られる。他に中世に遡ると考えられる銅造地蔵菩薩立像や大涅槃図など寺宝多数。



銅造地蔵菩薩立像

像高 41.2cmの小像ながら、全身のバランスがよく、やや煩雑な衣の皺も流麗にまとめられた美作。右手の持ち物は欠失するが、おそらく、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ通例の姿。わずかに左足を前に進め、六道をめくりながら衆生を救済する様子を表す。顔つきや衣の表現から、制作は13世紀半ばから後半頃に遡る可能性がある。なぜ手間のかかる銅造にしたのか、どのように信仰されてきたのかは不明だが、地蔵菩薩を本尊とする当寺に伝えたことに、その故ありとすべきなのだろう。



絹本着色 釈迦涅槃図

釈迦の入滅を描いた涅槃図は、旧暦2月15日に行われる涅槃会の本尊。釈迦が横たわった姿の仏像として立体的に表される場合もあるが、多くは絵画形式で、堂内の天井から床まで達する大画面の作例もある。本図も縦206.0cm、横141.5cmの大幅。画面中央に、宝床の上に横たわる釈迦、周囲には嘆き悲しむ会衆の姿を描く。画面下部には多数の動物や昆虫の姿も描かれる。周囲の風景は、インドはクシナガラの河のほとり、沙羅双樹の林が描かれ、上空には雲がたなびき、満月が浮かぶ。釈迦や群衆の描き方には形式的な表現が見られるが、全般に落ち着いた色調で丁寧に描かれ、制作は室町時代に遡る可能性がある。背面に墨書銘があり、寛文7年（1667）に、福德寺の住持・教養房秀範が、修復のため本図を江戸城下に持参した旨が書かれる。

第5章 もうひとつの大坂の陣 —松平忠輝の失態—

1 松平忠輝の父と母と妻と

慶長八年（一六〇三）に森忠政は美作津山に移った。これに代わって家康は海津城に六男の松平忠輝をおいた。この時、松平の城で「松城」と名が代わったとする説がある。

忠輝の母・お茶阿は遠江国金谷村の人で徳川家康の側室である。前夫との間に娘がいて初（ハ）^{はつ}といった。初は花井吉成を夫としている。花井吉成は松平忠輝とは義理の兄弟という関係になる。花井吉成はその後、海津城を任されることとなる。

忠輝の妻は、伊達政宗の娘・五郎八（いろは）である。伊達政宗は義父にあたる。慶長十一年（一六〇六）、忠輝が十五歳、五郎八が十三歳であった。この結婚については、伊達政宗の思惑があったという。伊達政宗はこの政略結婚によって、豊臣大名から徳川大名への転身に成功したという見方がある。このためか、五郎八は忠輝が改易されると、伊達政宗のもとに戻るのである。

松平忠輝の兄弟としては、二代将軍となる徳川秀忠をはじめとして、徳川家康の九男・義直は尾張五十三万石を領し、十男・頼宣は駿河・遠江五十万石を領し、十一男・頼房は水戸三十五万石を領している。松平忠輝が北信濃を領有したのは、こうした流れのなかで、家康の意図によるものと思われる。

2 おねと茶阿と忠輝と

大坂の陣が起ると、忠輝は大坂へと向かった。しかし、ここで忠輝は大きな過ちを犯した。まずは、徳川秀忠の直臣を殺害するという事件である。また、大坂夏の陣における遅参、もしくは、真田幸村との直接対決の場において、伊達政宗と同じ場所にいたのにもかかわらず、この時、「高みの見物」をしていたというのである。

これらのことが重なって、父・徳川家康は忠輝と面会することを拒んだ。誤解を解こうと忠輝はさまざまな人脈を通じて、家康との面会を求めている。

興味深いのは、おね（高台院）に仲介を願っていることである。おねは豊臣秀吉の夫人で

あるが、秀吉亡き後には外交にたけた人物として、さまざまな仲介をしている。表紙に掲載したおねの書状によってその様子を見ておきたい。

これはおねが茶阿に宛てたものである。内容は、駿府において茶阿、徳川家康、松平忠輝、将軍の徳川秀忠の健勝を祝して、忠輝への取り成しを依頼するものである。徳川家康を「大御所」、松平忠輝を「少将殿」、徳川秀忠を「将軍」と記している。慶長十年（一六〇五）から家康が亡くなる元和二年（一六一六）までの間のものである。おねと徳川家との関係が知られて興味深い。

こうした交渉も実を結ばず、元和二年、家康の死後まもなく、兄であり将軍である徳川秀忠によって忠輝は改易されるのである。

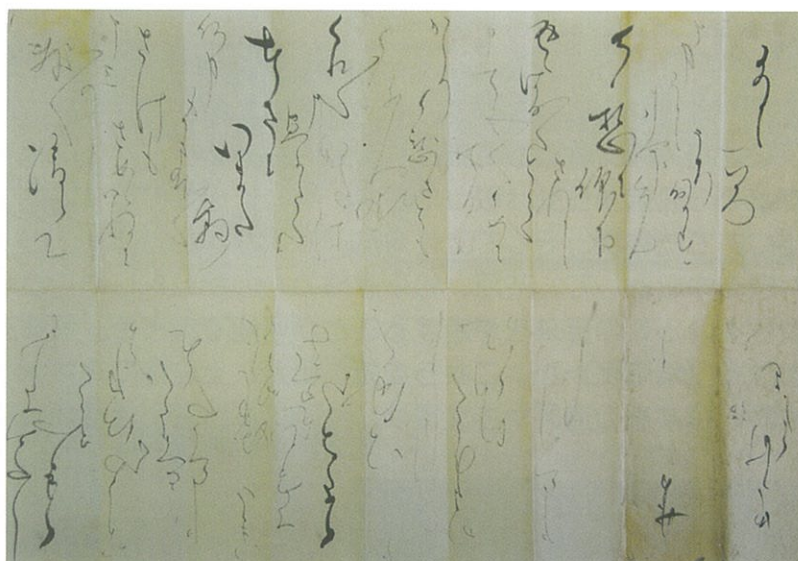
晩年は、諏訪の貞松院で送り、九十二歳の人生を全うした。

3 花井父子と忠輝

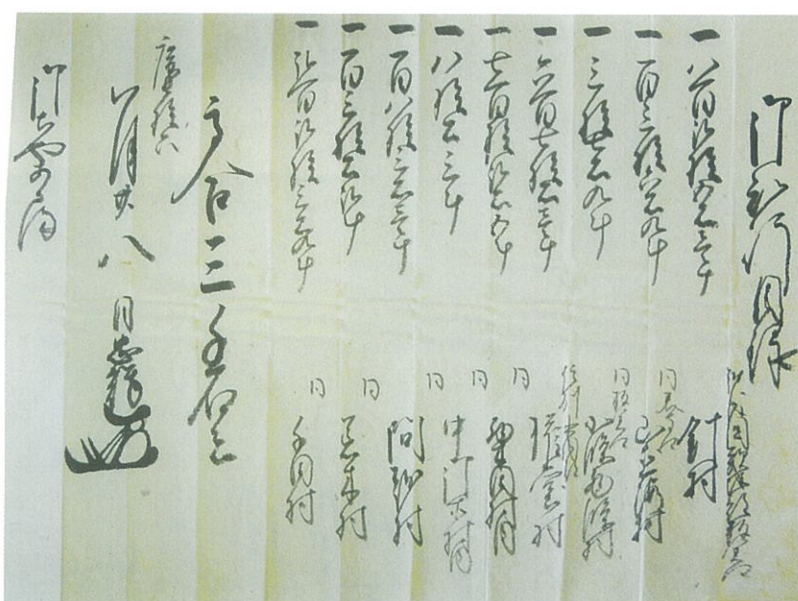
松平忠輝と人生を共にしたのが花井家である。花井吉成の妻は松平忠輝の姉である。忠輝が越後に入ると、海津城に花井吉成が入る。吉成の後、息子・花井義雄がその跡を継いでいる。しかし、秀忠の旗本殺害や大坂の陣における忠輝の遅参事件をうけて、常陸笠間の松平康長に預けられ、元和二年六月二十二日に切腹したと諸記録にある。

同年六月二十六日付の花井義雄あて松平忠輝書状をここに紹介する。花井義雄からの書状に対しての返答である。義雄については切腹も覚悟していたが松平康長へのお預けとなったということで安堵している。この公事については言い分もあるが仕方がない。命永らえれば取り成しもあるだろうからそのときを待とう、というものである。しかし、既述のように、すでに義雄は切腹しこの書状を読むことはなかったという。

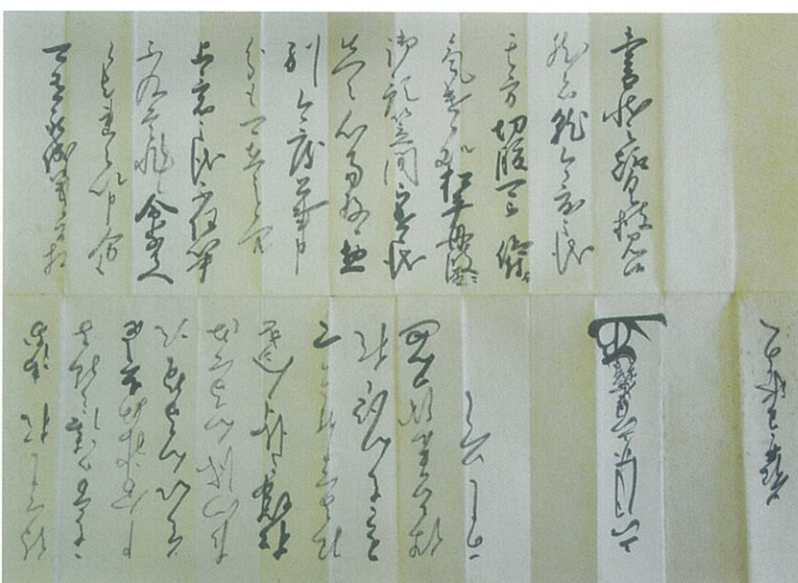
花井家はその後土佐国の山内家に仕官している。



お茶阿あて伊達政宗書状



お茶阿あて松平忠輝知行宛行状

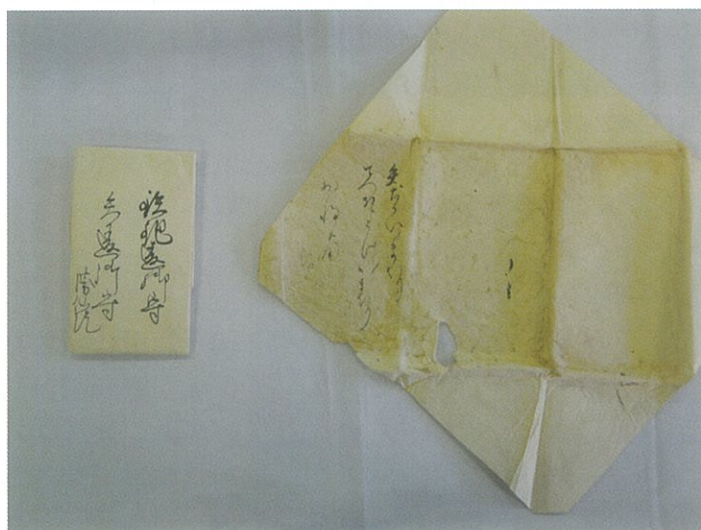


花井義雄あて松平忠輝書状

花井家の名宝

花井家には松平忠輝の具足をはじめとして、茶阿関連のもの、花井家関連のものなどが伝えられてきた。また、現在花井家文書として残されるものをみると、四つの性格の文書が混在する。第一に松平忠輝がその兄弟から受け取った書状、第二に忠輝の母・茶阿にあてた書状、第三に花井吉成・義雄にあてた書状、そして土佐藩花井家にかかわる書状、と分類できる。

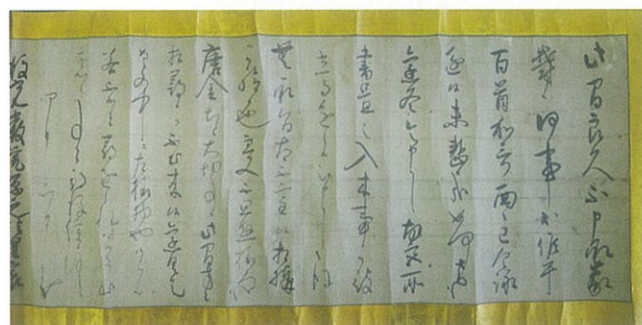
このように、花井家を中心として、茶阿、松平忠輝のものが伝来したことがわかる。この伝来には、花井家の女性を介しての伝来を想定することが可能であろう。具体的には、茶阿の娘で花井吉成の妻・おはる（隋応院）が、これらを持ち伝え、土佐藩の花井家へと引き継いだと考えられる。松平忠輝、花井家の道具や古文書は、女系によって引き継がれたのである。



鉄砲違御守・矢違御守



お茶阿所用の印章



後光厳天皇宸翰

博物館だより 第97号

発行日2016年3月31日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414

TEL:026(284)9011

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400

TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659

TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3

TEL:026(262)3500

ミュゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1

TEL:026(262)2500